

物理は嫌いでも、寅彦は好き

堀内 恭

中学・高校時代と一番苦手な科目が物理だった。数学も苦手だったが、まだ5点、10点は取れたが、物理は0点をよくもらった。だから、寺田寅彦が高知にゆかりの人物であることは知っていたが、物理学者ということで敬遠していた。

それが浪人時代に、たまたま筑摩書房「現代名作集」の寅彦の「団栗」を読んだことで一変に寅彦の詩情ゆたかな文章、そして彼のことが好きになったのだから不思議だ……。

「もう何年前になるか思ひ出せぬが日は覚えて居る」で始まる文章の何と清々しいことか。そして浪人生活という落ちこぼれてしまった日々の中で、何かに救いを求めていた自分にとって、寅彦と安岡章太郎（三浪していたという親近感で読み出した）の二人は、救いの神であった。

今回『勝手に寺田寅彦的語録』なる冊子（入谷コピー文庫という趣味の冊子）を作ったのは、今でも心が沈んだ時に読み返す、寅彦のエッセイの言葉の中に、何か生きてゆくヒントのようなものを見つけたのが一つ。

あと一つは、親の介護で高知－東京を往復する生活において、高知でも東京でも、まだまだ寅彦の存在が知られていないなあという実感があつたからである。特に土佐人は〈龍馬・よさこい・カツオのたたき〉に人気が集中しているので、寅彦や私小説作家・上林暁（個人的に）のことをもっと知ってほしい。

冊子が出来て、お送りしたある方は「私の方では年齢の事など構わないでいても、年齢の方では構わないでおかないのだろう」という寅彦の言葉が一番心に残ったと葉書をくださった。ありがたいと思った。

つい先日知人の娘さん（保育士）と坂道ですれ違った。近くの寺で園児たちに見せようと団栗拾いをしてきたとのこと。沢山の団栗を見て、ふと寅彦のニガ笑いを見たような気がした……。

